

環境こだわりナバナの花蕾色改善技術			
【要約】花蕾色の濃いナバナの中生品種‘花飾り’の催芽種子を、5 で8～12日間種子冷蔵処理し、早生品種‘京の春’と同時期まで収穫開始を前進させることで、年内収量や花蕾色は改善できる。			
農業技術振興センター 栽培研究部 野菜担当		【実施期間】平成18～19年度	
【部会】農産	【分野】高品質化技術	【予算区分】県単	【成果分類】指導

【背景・ねらい】

近年、東近江地域を中心にナバナの産地化が図られ、環境こだわり農産物として生産販売されている。しかしながら、ナバナを環境こだわり農産物認証基準内の施肥で栽培すると、生育後半に肥料切れを起し、減収や花蕾色の低下を招く問題が生じている。そこで、早生品種よりも花蕾色の濃い中生品種を用いた収穫期前進化技術について検討する。

【成果の内容・特徴】

中生品種である‘花飾り’の催芽種子を5 で8～12日間冷蔵処理すると、頂花蕾の平均収穫日は早生品種の‘京の春’と同程度まで前進するが、収穫時期の揃いは悪くなる(図1、表1)。

早期(10～11月)収量は、12日間の種子冷蔵処理で最も高くなるが、年内収量が最も高くなる催芽種子の冷蔵処理期間は8日間である(図2)。

‘花飾り’の花蕾色は、種子冷蔵処理により収穫を前進化させても、早生品種の‘京の春’より濃い(図3)。

【成果の活用面・留意点】

平成18年度の結果は、9月10日に播種し得られたものである。

裸種子のゲル封入により、催芽、冷蔵処理後の播種作業性が向上する。

ゲル種子の発芽率は低いですが、1穴6粒程度の種子を播種することで欠株をほぼ無くすことができる。

ゲル種子にはS、M、Lサイズがあり、Mサイズなら1ゲル当たり最大3粒、Lサイズなら最大5粒の裸種子を封入することができる。

ゲル種子1個当たりの加工費は2.5～3円である。

ゲル種子の種子冷蔵処理は、タッパー内で水に浸漬した状態で行う。

種子冷蔵処理期間が長く収穫が前進化しすぎると、比較的温度の高い収穫初期に小花枯死や花蕾の乱れ等が発生しやすく、平均花蕾重が低下しやすい。

[具体的データ]

表1 頂花蕾の平均収穫日 (2006年)

試験区	平均収穫日
‘花飾り’ 14日処理	10月20日
‘花飾り’ 12日処理	10月26日
‘花飾り’ 10日処理	10月30日
‘花飾り’ 8日処理	10月26日
‘花飾り’ 6日処理	11月7日
‘花飾り’ 無処理	11月16日
‘京の春’ 無処理	10月31日

注) 播種日 2006年9月10日。
 種子冷蔵処理各区には、裸種子1粒を封入したMサイズのゲル種子を用いた。20℃で12時間催芽した後、5℃で所定の期間種子冷蔵処理し、直播きした。無処理の2区には裸種子を用い直播きした。
 畝幅 1.5m × 株間 30cm・2条植え (444株/a)。1区9㎡1区制。環境こだわり認証基準内の施肥で栽培した。

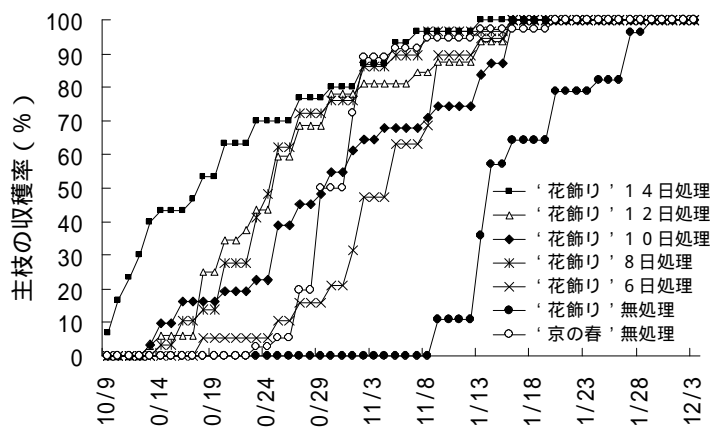


図1 種子冷蔵処理期間が頂花蕾の収穫期に及ぼす影響 (2006年)

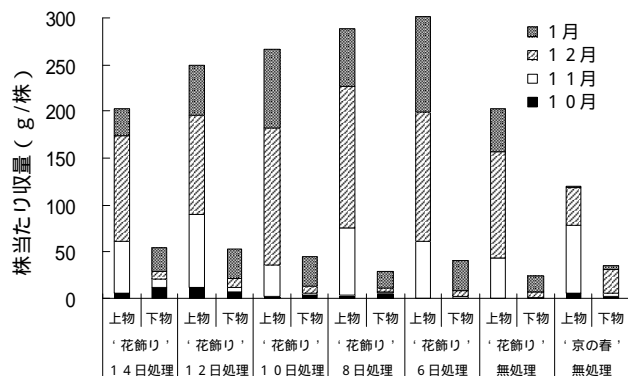


図2 種子冷蔵処理期間が時期別収量に及ぼす影響 (2006年)

注) ‘花飾り’は発芽不良や立枯れで欠株が多発したため、調査株(10株)の光環境が良くなり、1株当たりの収量は多い。

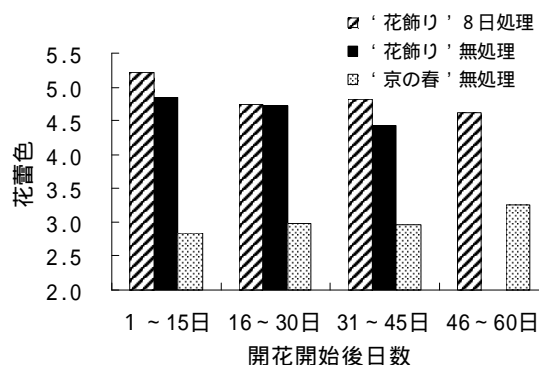


図3 品種、種子冷蔵処理が花蕾色に及ぼす影響 (2007年)

注) 2007年9月21日播種。種子冷蔵処理は、20℃で12時間催芽後3℃で行った。栽植密度、施肥は2006年と同様である。花蕾色はカラスケール(富士写真フィルム社製)で測定した値の平均値で示した。

[その他]

・ 研究課題名

大課題名：琵琶湖の水質・生態系保全に配慮した特色ある農林水産技術の開発

中課題名：環境こだわり農業推進のための技術開発

小課題名：環境こだわり野菜生産技術確立事業

・ 研究担当者：田中寿

・ その他特記事項：平成17年度政策的試験研究課題 (環境こだわり農業課)